

平成27年度 自己点検・自己評価(報告)

学校番号	24	学校法人静岡理工科大学 静岡北高等学校	記載者	廣住雅人
------	----	---------------------	-----	------

学校教育目標	1. 常に誠実で、清らかな心をもって物事に真剣に取り組むことができる人材を育成する。2. 現状に甘んじることなく、日々新しいものを創り出そうとする気持ちを持ち、何事にも積極的に挑戦していく人材を育成する。3. 技術の進歩が著しい今日、大学院・大学・専門学校という高等教育機関の場において、高度な科学技術を習得できるように、基本的な学習を身に付ける。	【総合評価】 校訓の「質実剛健」、「創意実践」を要にして、学校目標に近づくために、教職員が励み、生徒が努力した1年であった。特に、学校目標1に掲げている「誠実」、「清らかな心」を持った生徒が増え、教員の生活指導が減少。集会(全校・学年)での態度も良好である。学校満足度の結果にも表れているように、学校に対して厚い信頼を寄せている生徒が多いうことが本校の強みである。今後も教職員が一体となって教育活動を展開するとが発展に繋がると信じている。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる。			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 教育力強化策を推進する ～「特色ある教育プログラム・教育システム」の開発を進め、進路実績の向上を図る。 (1) 教員の指導力(教科・生活)の教科を図る。 (2) 中高一貫教育を確立する。 (3) 理数教育を推進する。 (4) SSH事業を推進する。 (5) 独自の進路指導プログラムを展開する。	4	(1)～(5)を担当する分掌では、それぞれ目標達成に向けての活動が行われた点では評価は高いが、連鎖性に欠けたことと全体での検証が行われなかった。	同様の重点目標が継続されることが予想される。各担当分掌でのPDCAを確実に、全体でのPDCAも行う。	
2 法人内連携教育の教科を図る ～法人内大学、専門学校との連携教育を、受益者のメリットを際立たせる教育プログラムへ改編し、 高・大一貫コース、高・専一貫コース生を核として、志願者の増加を図る。 (1) 一貫教育の魅力あるプログラムを再構築する。 (2) 大学、専門学校の認知度や魅力を高める広報活動を展開する。 (3) 大学、専門学校の有益な情報をリアルタイムで広報する。	4	高・大一貫教育については、昨年度に続きワーキンググループでの検討が続き、これまでの教育に対するブラッシュアップに繋がった。高・専一貫教育については、高・専連絡会議が定期的に行われ、担当者間の意見交換が十分に行われている。	引き続き、ワーキンググループや連絡会議で情報を共有し、高校側にとっても大学・専門学校側にとっても、質と量の獲得に努める。	
3 国際化教育の充実を図る ～国際理解や国際交流に貢献できるグローバル人材を育成する。外国語を通じて言語や文科の理解、 情報や考え方を的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を育成する。 (1) 英語力は勿論のこと、異文化理解、他人との受容力や対応の柔軟性を育む。 (2) 受験英語の学習とともに、英語力を育む学習機会を研究する。 (3) 情報や考え方などを適切に発信し得る力を身につけさせる学習法を検討する。	4	これまで提唱していた国際化が、周囲の影響もあり、一気に活発化してきた。海外との連携が多いことにより、こちらから出かけた、海外校が来校する機会が多いので、環境的には非常に恵まれている。	英語4技能の習得を目指すとともに、話せる英語の習得と、機会を得たらその英語を発信できる能力を身につけることを指導する。	
4 目標入学者数を達成する ～目標入学者数を確保し、健全な運営体質の維持を図る。 (1) 教育内容をアピールする広報活動を展開する。 (2) 他校との差別化を図れる広報媒体を作成する。 (3) 来るべき募集対象人口激減期への対応策を検討する。	4	広報活動の始まりである「体験入学」において、中学3年生とその保護者で2,015人を集客できたことは、静岡北高校への関心度が窺えた。学則定員440人に近づけることを最良策として、分析や広報活動や行ってきたが、結果的には定員超過となってしまった(+41人)。	募集地域で約180人の中学3年生が減少する。その他の外部環境も考慮しながら、平成29年度入試を分析し、学則定員440人に近づける。	
5 学校経営方針を実現するための教育活動の展開及び教育環境を構築する	3	上記4点を実現するために、それぞれの分掌で取り組んできた。ただし、日常業務に追われながらのことなので、活動の展開・教育環境の構築は遅滞気味である。	教育活動の展開や教育環境の構築のために、日常業務の精査を行う必要があり、教職員のベクトルを合わせて取り組んでいく。	

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績		成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	年度末には教育目標がほぼ達成されているが、年度初めの計画に従い、年度途中での進捗状況に遅滞が生ずることのないようにする。	法人、学校としての教育目標が掲げられ、前年度の反省録を含みながら、学校経営計画書が作成され、教員各人への落とし込みが図られた。	4	校長との情報交換を密にすることで、各教員が自分のミッションをよく理解し、計画された施策を実行し、外部から高い評価を受ける教育を展開した。	成果に満足することなく、各分掌官の連携をとりながら、高校教育改革・大学教育改革を見据えながら学校経営に挑戦する。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	次期学習指導要領見据えながら、自校の教育プログラムの推進を図る。 家庭学習(探究型学習)の定着を図る。 コース制の変更に伴う、生徒の進路(コース)選択に対して適切な助言指導を行う。	日常業務的には、評価項目を概ね達成した。次期学習指導要領実施に向け、改訂の狙いをふまえ、本校の現状と将来像を鑑み教育課程を編成した。	4	次期学習指導要領に関する研究は、教員への情報提供にとどまらず、教科部会で情報交換をすることで進捗・内容に関する調整を図ることができた。また授業アンケートをもとにした授業改善は行われたものの、十分なスキルアップ研修は行われなかった。	次期学習指導要領に基づいた新教育課程の編成をにらみながら、中高の接続や学科再編等の検討を考える。また、個々の教員のスキルアップをしていくことで、どの教員も個々の生徒の学習レベルに適した授業展開を行う教育環境を整える。
生徒指導	健全な高校生活を送れるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	心の成長を促進するような学校行事の計画や、生徒が積極的に外部との交流に参加できるような計画を立案し、価値観が多様化してくる社会を自ら知り、自ら解決していく能力を高めさせたい。	問題行動が0になった訳ではないが、年々発生件数は減少している。理由としては、入学生と心の成長と、それを促す教員の指導力がある。問題発生時の初動と、その後の対応が効力を発揮している。	4	学校全体では担任指導課、学級では担任による指導がタイムリーに展開され、問題行動を起こした生徒への対応や悩みを抱える生徒への対応が迅速かつ的確に行われた。	問題行動を起こさないといった気持ちを持つ生徒を育成する。また、一層複雑になる社会環境の中で、心の病を抱える生徒たちに対しては、個々の生徒に応じた適切な指導体制を整える。加えて、社会に出る心構えとして、改めて基本的な生活習慣を確立する。
進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキュリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、就職指導、進路指導、キャリアパートナーシップ事業	これまでの成果に満ちたことなく、時代の主流を捉え、各界に求められる人材の育成を図れるような教育プログラムを再構築する。	上級学校への進学から就職に至るまで、そして、平日の放課後の講座や隔週土曜日の講座(サタデースクール)等、生徒の「夢の実現」に向け頑張るが「好き」を叶えるために、教員一丸となつての指導が行われた。	4	日常生活の中で生徒自らがPC教室の利用による情報収集や教員からの情報提供により、早期段階から進路意識を高める教育活動を実施することができ、確固たる進路実績を成果として残すことができた。また、キャリアパートナーシップに関しては、法人内・間の高等教育機関の協力を得ながら、受け入れ事業所を拡大することができた。	高校卒業後のさまざまな進路選択があると同時に、その後も「単線型キャリア」、「複線型キャリア」等、生徒の将来は多種・多様である。それに対する基本的指導を教員の共通理解のもと行う。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険個所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる必要がある。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	震災に遭った際、今まではマニュアルにのっとる集団行動が主であったが、今後は、個々に生き抜く意識の高揚とその実践的防衛を指導することが大切と考える。防災教育を推進する。	防災訓練は、時間的制約もあり、避難経路の確認と、津波被害を想定して高所への迅速な移動を行った。スクールバスの運転手安全運転講習も実施され、安全選手に対する意識は常に高いものがある。	4	校内の危険箇所に関しては、学期の初めと終わりに危険個所の確認を実施した。スクールバスの運行に関連しては、公共の避難場所地図の配備、安全運転講習を実施した。	防災意識の継続的啓発活動の実施と安全管理に関しては、現状以上に意識を高める。加えて、教員の危機管理に対する意識をさらに強める。
健康管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療助言を確実に行う。また部活動の活性化を図り、ボランティア活動に積極的に取り組む。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化、ボランティア活動への参加	生徒の保健委員会を活性化させ、健康管理、怪我防止への日常の呼びかけを行っていく。利用人数が増加傾向にある心の相談で来室した生徒への対応を、生徒相談員やスクールカウンセラーと連絡を密に取り合い行う。保健室の管理(薬品、個人情報)機能を高める。	生徒・教職員の健康診断受診率を高めることができた。各種検診では、これまでの実施方法に改良を加え、全体検診時間の短縮を図れた。安全衛生委員会の機能を高めることが課題である。	4	校医との連携を取りスムーズな検診を実施できたが、治療助言に関しては、昨年同様三者面談も通じて保護者の協力も得た。県大会出場運動部、東海大会出場運動部、全国大会出場運動部と活躍が目立った。	治療助言が出た生徒は、確実に直させる指導を徹底する。また、運動部・文化部共に今年度以上の成果が残せるような活発な活動を展開する。
特色ある教育	法人のスケールメリットをいかし、本校独自の高・大・高・専一貫教育を推進し学園全体の活性化を図る。また、課題研究を推進し他校との差別化を図りつつ、進路実績につなげる。	高・大・一貫教育、高・専一貫教育、外部機関との連携教育、SSH事業への取り組み、課題研究	高・大・一貫教育・高専一貫教育の内容の検証と検討。社会で求められる課題発見力、課題解決力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力を身に付けさせるために課題研究を推進させる。	静岡理工科大学進学者・法人内専門学校進学者の安定した数の送り込みができた。開催12回を重ねた課題研究発表会も対象者が増え、運営方法にも改善が加えられた。	4	高・大・一貫教育に関しては、大学と高校間でワーキンググループを作り、平成28年度入学生からの実施に準備を進めた。高・専一貫教育に関しては、高・専連絡会や普通科・学年部からの意見・要望が専門学校の側に理解され、諸活動に反映されている。	高・大・一貫教育に関しては、ワーキンググループの答申を受けプランを推進するための法人・大学・高校の経営サイドの協力を得ながらプログラムの充実を図る。高・専一貫教育に関しては、高校・専門学校の教員の意識にずれが生じないように、より連携を密にしながら思い切った改革を検討する。また課題研究については、連携機関を海外に求め幅を広げ、さらにはより生徒主体の取り組みに移行していく体制を構築する。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績		成果と課題	次年度の取組
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が服務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の策定及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、効果的な活用がされているかチェック機能の確認をする。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、効果的な活用がされているかチェック機能の確認をする。	委員会やプロジェクト等で今日的な本校の進むべき道が検討され発表された。 ウェブフロー・システム(文書の電子化、電子印)の導入により、情報と文書の管理が適切に行われた。	4	評価項目・達成目標に対しての態勢づくりは希薄であった。また、部長会を通じて横の連携に努めたが、いままっ共通理解に欠けるものがあつた。職員の服務意識に関する啓発はしっかりと行われた。危機管理に関しては、法人の連絡がやや遅かつた。経理関係のことに限らず、管理、予算編成・執行共にしっかりと行うことができた。情報管理に関しては、フロントアウトされたものがプリントアウトされるなど若干の甘さがある。文書管理については、異議書・報告書関係の保存を電子化するシステムを作ったが、逆に処分する体制作りができていない。	組織をスリム化することにより円滑な組織運営ができるようになる。また、些細なことであっても報告・連絡・相談をしていくことで、情報の共有化を行い風通しの良い組織づくりをしていく。経理業務に関しては、中小期計画も時流で変化している中で、それに伴って予算計画も変更していく。また、コンプライアンスが求められる時代の中の学校として、情報の管理意識、教職員の規範意識についても、継続して啓発活動をしていく。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	系統的・継続的な実施のために、教職員必須の研修や、時流に即した研修を計画する。	予備校等における教育研修セミナー継続的な参加により、指導力向上に繋がっている。 教員が単独で参加した研修については、職員会議を利用して報告し情報の共有化を図っている。	3	教職員の資質・指導力向上のため、重点目標に基づいた校内研修計画が、立案・実行され積極的に参加した面もうかがえたが、理解・実行面・フィードバックの面で希薄であった。また、報告書の回覧はされたものの、報告会は実施されなかった。	時代をとらえた研修内容を精選して実行し、さらに積極的な参加意識を持った教員集団が形成されていく。さらに研修報告会を実施すると共に、次に何をしたらよいのかを考える話し合いを実施していく。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を聞き入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	ねらいの原点に戻り、学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を聞き入れる方法を再構築し、本校の更なる発展を目指す。	保護者の会が、講演会や広報誌など、自ら積極的に活動をする中で活性化してきた。学校の教育を理解し、教育活動に協力的な保護者の会に成長しつつある。	4	保護者の会との間では、定例会をスムーズに実施するため、三役と事前口頭での説明と意見交換を行い連携を図ることができた。また、キャリアパートナーシップについては、法人内の大学・専門学校との協力を得て、独自に企業開拓を行うことができた。	保護者の会との定例会がルーチンで終わることなく、積極的な意見交換の場として発展させていく。また、新たな支援団体の協力を得てキャリアパートナーシップを展開する。さらに地域住民が本校に足を向けたくなるようなイベントをSSH事業を中心に展開していく。そのためにも広報媒体としてホームページを積極的に活用し情報を発信を行う。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	日常的に使用する施設や用具、備品による事故・怪我が起こらないようにチェック体制、教職員の危機管理体制を構築する。 節電への取り組みを行う	生徒が求める書籍(大学進学、進路選択、SSH研究関連、等)は、年々充実してきた。校舎も新たに増築し、小教室授業に支障がなくなった。施設・設備の定期点検も実施された。	4	大規模な行事前教室整備でワックスを掛けることが習慣化され、あえて実施日をもうけず実行された。また、修理依頼に関しては口頭で受けた部分もあつたが、「修理願」を提出しての対応がほぼできた。図書に関しては、取り組み生徒が広がる課題研究に関する関連図書を充実させることができた。	小教室の使い方指導と清掃を確実に実行。修理依頼に関しては、文書で行うことを徹底する。また、生徒会の美化委員会を通じて美化意識の啓発活動を実施する。図書館に関しては、放課後の利用も考え照明を明るくする施設改善を実施する。
				総合評価	4		